

和名: ミチタネツケバナ（道種浸け花、路種浸け花）

前回紹介したタネツケバナの近縁種です。1970年代に日本に入り、平成の時代にあつという間に広がりました。見分ける一番の方法は、果実の付き方でしょう。タネツケバナは棒のような果実が茎から広がって付くのに対し（よろしければ前回の写真を見てみてください）、ミチタネツケバナは茎に沿うように直上します。花から飛び出すように見えるときもあります。果実が花の高さを越えるのも特徴です。ミチタネツケバナのほうがやや乾いた土地に生えます。安来高校では3月上旬はタネツケバナが多かったですが、3月下旬ではミチタネツケバナのほうが多くなったように感じます。外来種の勢いは凄まじいです。

**和名: オランダミミナグサ**（和蘭耳菜草）

明治時代にヨーロッパから入ってきた帰化植物です。在来種のミミナグサに似ているのでこの名前がつけました。葉が肉厚で触るとフワフワしており、茎に向かい合って付いている様子がネズミの耳に似ているそうです。葉の上部で枝分かれするのも特徴的です。花びらの先端が裂けているのが可愛らしく感じられます。オランダミミナグサはミミナグサ



に比べると全体的に毛が多いので、触ったり写真を撮ったりするとその毛の存在感に気付かされます。また、ミミナグサの茎や蕾などは暗紫色を帯びている対

し、オランダミミナグサは全体的に緑色であるのも違います。と言いながら、ミミナグサは現在ではほとんど見られなくなりました。私自身もこれはミミナグサだ！と思える個体を見たことがなく、経験で違いを語るできません。ミミナグサは枕草子にも登場するそうで、昔は普遍的な野草だったのでしょう。

和名: タチイヌノフグリ（立犬の陰囊）

前回紹介したオオイヌノフグリの近縁種で、同じ頃に日本に入り全国に広がりました。茎の上部が直立するので「立ち上がって伸びるイヌノフグリ」という名前がつけられています。地面からの高さは10cm程度です。オオイヌノフグリの花が8~10mmほどあるのに対し、タチイヌノフグリの花は3~4mm程度で、しかも葉に隠れるようにひっそり咲くので、あまり目立ちません。しかし花の様子はそっくりです。右下の写真は左がオオイヌノフグリ、右がタチイヌノフグリです。大きさこそ違いますが、青紫色の美しさは同じです。



ユキヤナギの花に虫が止まっていたので、近付いて撮ってみました。最初はハチかと思いましたが、よく見ると眼や口の形が違うので、どうやらハナアブの仲間ようです。懸命に蜜を吸っているので、カメラのレンズを近づけても全然逃げませんでした。春になって一気に花が咲き始めたので、昆虫も蜜を得るのに大忙しなのではないでしょうか。

